第 5 節　書写書道教育とその演習の場合

はじめに

初等教育に関する演習では，現場で指導できる逞しい実践力を身に付けるために，様々な実践的演習が設けられている。ここでは，書写書道に関する演習について触れていくが，子どもへの指導法，教師として必要な技能などの観点から述べる。

1. 書写との関わり

子どもが漢字を覚えるときには，書くことを繰り返しながら覚えていく。文字を正確に覚えるにあたって，筆順や点画，字形など，適切な書き方を学ぶ必要があるため，書写学習には重要な意義がある。

小学校や幼稚園の教師を志す人にとって，将来現場に立った際，手書きで文字を書く機会はとても多いものである。掲示物，板書，学習指導，記録，連絡帳など，日々の学校生活全般において手書きの用件がある。保護者との連携においても同様である。情報機器ではできない手書きによる書写機会が往々にして行われる。

そこで，書写力は，教師として身に付けておきたい力の一つでもあろう。教師は，子どもとの関わりの中で，手書きによる多くのやりとりをする。教師の手書き文字は，子どもが日々目にするものであるため，子どもが文字に対して正しく丁寧に取り扱う態度や姿勢，見方，書字形成に大きな影響を与える。小学校では，国語科の書写の授業を中心に，文字を書く指導を行っていく。子ど

もへの書写指導に直接携わる教師が，正しく丁寧に書くことは，とても大切なことである。

2. 小学校国語科書写の学習指導

小学校国語科書写の学習では，文字を正しく整えて書く方法を習得し，多様な書写機会に対応する書写力の向上が目指され，書写の日常化が図られている。次に，小学校学習指導要領 国語における書写に関する内容を抜粋する。

小学校学習指導要領 国語（書写）抄録（平成20年３月28日告示）

第２章　各教科　第１節　国語

第１　目標

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し，伝え合う力を高めるとともに，思考力や想像力及び言語感覚を養い，国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

第２　各学年の目標及び内容

２　内容

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

(2) 書写に関する次の事項について指導する。

〔第１学年及び第２学年〕

ア　姿勢や筆記具の持ち方を正しくし，文字の形に注意しながら，丁寧に書くこと。

イ　点画の長短や方向，接し方や交わり方などに注意して，筆順に従って文字を正しく書くこと。

〔第３学年及び第４学年〕

ア　文字の組立て方を理解し，形を整えて書くこと。

イ　漢字や仮名の大きさ，配列に注意して書くこと。

ウ　点画の種類を理解するとともに，毛筆を使用して筆圧などに注意して書くこと。

〔第５学年及び第６学年〕

ア　用紙全体との関係に注意し，文字の大きさや配列などを決めるととも

に，書く速さを意識して書くこと。

イ　目的に応じて使用する筆記具を選び，その特徴を生かして書くこと。

ウ　毛筆を使用して，穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。

第３　指導計画の作成と内容の取扱い

２　第２の各学年の内容の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕については，次のとおり取り扱うものとする。

(2) 硬筆を使用する書写の指導は各学年で行い，毛筆を使用する書写の指導は第３学年以上の各学年で行うこと。また，毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導し，文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに，各学年年間30単位時間程度を配当すること。

(1) 小学校低学年における書写指導の視点

小学校の低学年は，文字の学習の始まりである。一点一画や一文字を確かめる段階であり，丁寧な指導を必要とする。姿勢や筆記具の持ち方，文字の形，点画，筆順など，文字を丁寧に正しく書くための基礎・基本が重視される。

文字を書く姿勢については，目と紙面との距離，背筋の伸び，足や手の位置など身体のバランスを保つことが肝要である。基本的には，運動や演奏，発声などにおける姿勢と共通するところがある。物事に取り組む気持ちの上での姿勢とも重ねて考えられる。姿勢によって，一本の線の引き方が大きく変化するものでもある。

また，子どもの身体面を考えた時に，文字を書く姿勢は，視力や身体への健康に関わるところがある。身体が湾曲した状態では，集中しにくく，学習に意欲的に取り組みにくい。目が紙面に近い状態は，視力低下にも影響するであろう。背筋を伸ばし溌剌と学習に取り組むことが望まれる。姿勢は，文字を正しく整えて書くためのことだけではなく，学習全般に関わる事柄である。しかし，文字を書く姿勢や筆記具の正しい持ち方は，容易に定着するものではない。姿勢の指導は，学習の導入や学校生活での様々な場面で繰り返し行われていくところである。そのため，子どもにとって意欲の持てる授業展開や様々な日常的工夫も大切となる。

次に，筆記具の持ち方について，幼児期には既に様々な筆記具を使用するため，その持ち方が各々に定着している状況にある。幼児期においては，表現を楽しむことが第一義であろうが，名前など文字を書くことに関わる場面があれば，書写指導に基づく方法が望ましく，指先に負担がかかりすぎないよう配慮したい。三角柱の筆記具などで，三本の指の加減に慣れさせる事例は有効である。また，鉛筆の持ち方は，箸の持ち方に共通する。上の箸の持ち方及び動作に近く，親指，人差し指，中指の三本によって自由な方向に動かせることが大事なことである。

一方，学生の鉛筆の持ち方に目を向けてみると，書写教科書に写真等で示された正しい持ち方をしている学生は多いとは言いがたい。鉛筆の握りにおいて，指先に力が入りすぎている傾向が見受けられる。人差し指の第一関節が反った状態で力が加えられ，下の箸の持ち方のように，親指と人差し指の間の付根に力が加わるケースである。また，親指が鉛筆や人差し指に巻き込む持ち方もよく見られる。しかしながら，各自の慣れた持ち方によって，それなりに正しく整った文字を書くことができている例も少なくはない。子どもに鉛筆の持ち方を指導する際には，正しく整った文字を書ける自身の持ち方を基準とせず，合理性の高い正しい持ち方を認識しておくことは重要である。

強く握りすぎる鉛筆の持ち方は，何かしらの指導において，濃くはっきりと強く書くことが強調されていたことが一因に挙げられるようである。学生にとって，十数年来持ち慣れた筆記具の持ち方を改善することは容易なことではない。しかしながら，各自にとって今後の長い年月のことを考えてみれば，筆記具の持ち方を検証していく意味は大きい。

(2) 小学校中学年における書写指導の視点

中学年においては，文字の組立て方や点画の種類を理解していく。整った形，漢字や仮名の大きさ，配列に注意して書くことが重視される。また，毛筆を使用する書写の指導が第３学年以上の各学年で行われる。毛筆による書の理解によって，初めて点画の動きや筆圧が理解されるものであろう。右払いなどは，硬筆の書き方のみで理解するには困難なところがある。毛筆による筆圧の変化や律動を実感して，硬筆書写の理解が深まる。

また，毛筆による学習の効用には，姿勢や持ち方に関係するところも大きい。

毛筆を使用する際の緊張感にも学ぶところがある。毛筆の場合，用具の特性により柔らかで繊細な筆遣いを行うことができる。毛筆を使用する際の無理のない自然な持ち方は，子どもが多くの文字を書く時の適度な筆圧の目安となる。

(3) 小学校高学年における書写指導の視点

高学年では，文字感覚が養われ，目的や用途に応じて，総合的に判断し書きまとめる書写力の育成が重視される。用紙全体との関係，文字の大きさや配列について自ら判断し，筆記具等を臨機応変に取捨選択していく。また，毛筆における穂先の動きと点画のつながりを理解することにより，書く速さに対応していくようになる。このことは，中学校における行書の指導につながる位置づけとなる。

3.「書写書道演習」について

書写教育に関する科目「書写書道演習」では，特に小学校国語科書写の指導法について考察し，毛筆を使用した書写の学習が硬筆書写に生かされるよう多角的に検討している。あわせて教育現場全般における様々な書写機会に対応できる能力を高めることを目的としている。さらに，書道や文字の文化についての理解を深め，創造性豊かな表現を行う。

目標としては，次のことを掲げている。書道や文字の文化について理解するとともに，基本的な技法を活用し書の作品を制作できること。書に関する問題解決力を身につけ，自立して学習でき，創造性豊かな書の表現ができること。書写の指導方法について理解するとともに，毛筆や硬筆を用いて様々な書写機会に対応できること。書写の技法を習得するとともに，書写の指導方法を創意工夫し実践できること。

(1) 概　要

本科目は，初等教育学科の専門教育科目の一つである。教科教育関係科目として，特に小学校国語科書写の指導ができるよう位置付けられる。また，小学校や幼稚園等の現場では，教師として，日常に書写する場面が極めて多く，その範となる書写力が望まれる。そして，子どもや保護者等との関わりにおいては，手書きでの日常的な交流が多くあり，書写技能の向上を必要とする。一方，書道文化全般に関する理解を深め，教育に生かすことができるよう考慮している。

実技を伴う演習を行うが，授業の形態として，専門教室を活用し，机の配置を学生同士が向き合えるようにしている。制作における考えや工夫を相互に高め合うことをねらいとし，問題解決型の授業展開をしている。学生同士のコミュニケーションや意見交換を重視し，集中して書く時間，話し合いを持つ時間等を区分している。

毎回の作品は，ポートフォリオとして，各自のファイルに入れ，一年間で一冊の作品集としてまとめさせている。前時の振り返りの際や途中段階での振り返りとして有効に活用し，一年間の各自の成長や到達度を自己点検しやすいものとなっている。また，作品集としてまとまった形の成果物となるため，学生は個々の取り組みの達成感や充実感を味わうことができる。このことは，書写の学習における児童のためのポートフォリオとして応用できるものと考える。

(2) 書の歴史や文化

毛筆を使う書の背景には，書の歴史や文化がある。文房四宝，書道史概説，書体について理解を深めていく。書体については，篆書，隷書，楷書，行書，草書，そして仮名の書等について扱い，特に楷書の書法を重視し，楷書古典の鑑賞，臨書，創作を行う。これらを通じて，書写力の向上にもつなげていく。その上で，書写書道教育に関する内容を取り扱う。書の教育概説，小学校国語科書写の目標と内容，書写教科書の実際，国語科書写学習指導，書写授業研究，教材開発の視点・方法，毛筆と硬筆の関係，書式研究，実用の書，板書，書き初め等の内容である。

書体に関する内容では，次のようなことが挙げられる。漢字の祖として知られる現存最古の文字は，甲骨文である。その刻された線質には，古代人が直接文字を書き刀で彫った感触があり，ユニークな書字造形である。篆書については，現代でも実印などの印鑑に使用される書体である。紙幣である日本銀行券にも表裏に篆書体の印影が見られる。身近なものに篆書が含まれているのである。同じく日本銀行券に見られる字体には，隷書が使用されている。他にも身近なものとして，多くの新聞の題字は隷書である。草書は平仮名の元となるものである。行書，楷書については，現代に日常的に使用する。一方，日本には，元々文字が存在しなかった。中国で書体が出揃い，それらの文字を受容していく中で，万葉仮名を起源に，歌文を表記する文化も関わり，平仮名の字体が完

成する。一例ではあるが，このような書の変遷に触れながら，脈々と続く文字文化について関心が広げられよう。

(3) 毛筆による楷書の基本点画と書き方

楷書を構成する点画の中，今日の書写指導における基本点画の種類には，横画，縦画，折れ，左払い，右払い，右上払い，点，そり，曲がりが挙げられる。いずれの書き方も，始筆・送筆・終筆によって形成される。

毛筆による書写において，点画の概形を三角形や四角形などと単純化して捉えると理解しやすい。横画や縦画については，長細い四角形に見立てることができる。折れなどはその連続した組み合わせと見ることができる。右払いは，三角形に見立てることができ，払う方向に運筆しながら，次第に筆圧を加えた後，筆管を徐々に引き上げ筆先をまとめていく。左払いも三角形と見立てることができ，始筆で筆圧を加え，払う方向に運筆しながら，徐々に筆圧を緩め，筆管を引き上げていく。点やはねなども小さな三角形と見立てることができ，大きさや運筆の方向により書き分けることができる。

(4) 書写指導上の留意点

児童が課題に取り組む中で，理解が難しいところも出てこよう。教師が書く姿を見せる範書については，児童の理解を助けるためにとても有益なことである。また，書写における添削指導については，様々な方法が考えられるが，自己添削による問題解決型の取り組みが挙げられる。また，教師が，児童の気付きにくい点について，個別に見ることのできる機会では，基本的には良くできているところを見いだし褒めることが大切な役割であろう。その上で，課題を絞り，次の目標や指標となる励ましの言葉が添えられれば効果が高いものとなる。本演習の中では，学生同士で児童役と教師役を行い，相互に添削指導を試みるが，最初は問題点の指摘が多くなりがちである。次第に，褒めることと課題の精査についてバランスが図られていくようになる。

4.「教科教育学演習」における書写書道教育の演習

教科教育学演習Ⅰ～Ⅳは，２・３年次に開講される演習科目である。児童教育コースでは，各専門分野による専修のゼミにおいて，その専門内容を深め，調査研究等を行う。また，学習指導案の作成，模擬授業の実践等を通して，小

学校の現場に即した実践力を高めている。それぞれの専修により特色ある教育研究活動が展開されているが，ここでは書写書道専修における演習について触れておく。教育研究については各専修共通するが，特色としては，書の作品制作及び展覧会の開催が挙げられる。書の古典臨書や創作による作品を制作し，展覧会の企画運営を行う。また，本学の地域貢献活動の一つである初等教育学科ソシオ活動として，書写書道専修の教育研究活動を生かした「書道のワークショップ」を開催している。毎年秋季に，地域の子どもとその保護者を対象とし，本学において，書写や書道に関する様々な学びを企画し体験してもらっている。詳細は，『広島文教教育』（「初等教育ソシオ」2007～2009，広島文教女子大学教育学会）で報告している。以上のことを基礎に，卒業研究につなげ，各自の研究テーマを設定していく。なお，卒業研究では，論文とともに，書写書道の作品制作及び卒業制作展を開催し集大成としている。

おわりに

子どもに書写の力を付けさせるためには，教師の丁寧な指導や関わり方によるところが大きい。書写は，学習活動全般に関わるものである。書写の時間における学習に止まらず，書写力が日常化，生活化していくことが大切である。早い段階における丁寧な指導とともに，子ども自らが学んでいくことのできる取り組みとしたい。子どもの視点を大事にしながら書写指導を考えていくことは，教師として身につけておきたい書写力の気づきともなろう。書写をはじめ，教育現場に出たときに実践できる力を，日常の様々な場面において意識し，それぞれに高めていってほしい。また，書の歴史や文化などから書のよさを理解し，子どもに興味関心を抱かせ，楽しみながら取り組むことのできる書写授業の展開が期待される。

参考文献

全国大学書写書道教育学会編　2009　明解 書写教育　萱原書房

（森　哲之）